

全労済協会 慶應義塾大学経済学部寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造」

第9回 2020年12月1日

「東洋思想を手がかりに考える」

作家・福聚寺第35世住職、玄侑宗久氏

私は福島県にある福聚寺というお寺の住職をしている傍ら、作家としても活動しています。今回の講義では日本人が持つ幸福観という視点から、SDGsに向き合う意味について考えていきたいと思えます。

■必要なのは、日本の幸福観を再認識すること

「あなたは、この国に生きて幸せですか」と尋ねた際に、YESと答える日本人が非常に少ないことが問題となっています。国連が発表した2019年の世界幸福度ランキングでは日本が58位。2018年は54位だったため、この1年間でまた下がったこととなります。

先日、ニュージーランドのアーダーン首相が「幸福予算」というものを設けると発表しました。主に精神疾患、子どもの貧困、家庭内暴力(DV)という3つの問題の解決に予算を充てることで、幸福を実現しようという取り組みです。ニュージーランドと比べると、日本はGDPで大きく上回っていますが、果たして幸福のためにお金を使っているのでしょうか。私はその点について、疑問を感じずにはられません。

しかし、私はニュージーランドと全く同じことをすべきだと言いたいわけではありません。国が変われば、幸福観や人生観は大きく変わるからです。例えば、日本は他者への貢献や労働によって幸福が得られるという文化を持っています。一方、西洋では労働を不幸と同義と捉えるような文化が見られます。フランスで仕事を意味する「travail」という言葉は、ラテン語で拷問という意味を持つ「tripalium」に由来していますし、ドイツ語で労働を意味する「arbeit」は強制労働という意味の単語から派生しています。

今後、日本人の幸福度を高めるためには、日本人が持つ幸福観を再認識した上で、そこにお金を回していく必要があるのではないのでしょうか。

■「しあわせ」の語源から、幸福観を捉える

日本人独特の幸福観を考える上では、言葉の語源が参考になります。例えば「幸福」という熟語は、happinessの訳語として明治時代に生み出されたものですが、これは「幸せ」という言葉から派生しています。

この「幸せ」は奈良時代から使われていましたが、当時は「為合」という字を書きました。「為」の主語は天や神ですから、神様がなさることに合わせるしかないという意味を含んでいます。つまり、「運命」とほぼ同じ意味だったわけです。

ところが、室町時代に入ると「仕合せ」と書くようになります。この場合の「仕」の主語は人ですから、要するに受け身の対応力こそが幸せの鍵だ、と考えられるようになりました。

■仕合せを実現するために「良好」を重んじる

東洋思想には「陰と陽」という考え方があります。日本にもすでに「日本書紀」で入っています。身体や数字など、あらゆるものを「陰」「陽」に分けるのですが、これは「陽が良くて、陰は悪い」というものではなく、両者は対等で、陽と同じように陰も大切だと考えます。このように、対概念の双方を受け入れ、大切にす思想を「両行」と呼びます。

立場の違う2人が同じ意見を持つことは難しいですが、仲良くすることは可能です。一つの価値観に捉われることなく、どの考えも良しとする「両行」を取り入れることで、これまで日本人は人に仕合わせてきたのです。両極端を踏まえることで対応力は格段に増します。

身近なところでも、日本はさまざまな相容れないものを共存させています。日本語には「義理と人情」や「本音と建前」といった、相対する言葉を並べた熟語が多くありますが、果たしてどちらが大事なのかと問われれば「どちらも」が正しい答えとなるでしょう。

他にも、日本語は中国から流入された「漢字」と、日本独自の「かな文字」が共存していますが、漢字が絵画的な文字であるのに対して、かな文字は音声から派生した文字。特性の異なる2種類の文字が共存している言語は日本語以外にありません。

普段何気なく乗っているエスカレーターにも「正しい乗り方」が存在せず、関東と関西で左右の乗り位置が変わります。京都に至っては、前の人に合わせる事が正しいとされています。

答えを一本化せず、二本化すること。それこそが日本化だと言えるでしょう。昔から日本では「鶴と亀」を祀っていますが、これは長寿のシンボルではありません。この2匹は、全く異なる環境で生き、おそらく考え方も全く違うわけですが、相手を理解はできなくとも、仲良くはできるという「和合」のシンボルなのです。

■七福神から、ダイバーシティのヒントを学ぶ

江戸時代には、福をもたらす神として「七福神」が信仰されるようになります。この七福神にも、日本人が持つ「両行」の考え方が表れています。恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋からなる七福神ですが、そのうち日本由来の神は「恵比寿」だけで、他の神はもともとヒンドゥー教や道教の神であったり、臨済宗の禅僧であったりと、さまざまな背景を持っています。

さらに、唯一日本由来の神である「恵比寿」ですら、もともとは「蛭子(ひるこ)」と呼ばれる、イザナギとイザナミのもとに生まれた奇妙な子でした。おそらく「障がい」があったのだと思いますが、海に流されて棄てられた過去を持ちます。

このように七福神は、海外にバックボーンを持つ神や、一度は棄てられた神のみで構成されている不完全な存在です。スタンダードや正解がなく、だからこそどのような存在も受け入れる「日本人のおおらかさ」が反映されていると言えるでしょう。みんな不完全でみんな普通で対等で、加えて布袋和尚が大笑いしますから、仲良くできるという考え方です。

これからは、全く違う価値観を持つ世界の方々との対等のお付き合いが望まれます。特定の意見に捉われることなく、さまざまな多様性を受け入れることは、日本人の幸福度を高めることに大きく役立つのではないのでしょうか。

<文責：全労済協会調査研究部>